

良いとこ自慢・・・自分の園所が自信をもって誇りに思えるような取組
ここを改善・・・主にこれまでの特定教育・保育施設評価の中で課題・改善点として挙げた内容の取組

教育・保育目標 遊びながら学び育ち合う子ども達の育成			
(1)明るい子	(2)やさしく心豊かな子	(3)気づき、考える子	(4)根気強い子

【目標達成計画】

項目	園の現状や取組、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取組内容	成果	評価
共通課題	・新型コロナウイルス感染症予防対策について	・手洗いの順序や啓発を子どもにもわかりやすいように視覚で伝える。 ・給食等の接触を避けるため、仕切りや座る位置、配膳方法などを共通理解する。 ・幼児が遊びたくなる拠点の分散を意識した環境構成をする。	・手洗いの順序パネルを手洗い場に貼る。 ・給食時の対応として、仕切りや座る位置、配膳方法などを職員で共通理解し、環境を整えた。 ・各手洗い場の水道蛇口5つを手洗いは3つにし、歯磨き、うがいは2つにするなど感染予防を子供たちに周知させた。	・新型コロナウイルス感染予防として、マスクをしての生活、ソーシャルディスタンス等が定着した。 ・遊びのコーナーを仕切る可動式のパーティションを作ったことにより、子どもたち自身が能動的に遊びを創り出していくことが出来た。 ・密を避けながらの参観日で、保護者にも参観してもらった。	・「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」に沿った感染予防対策を行っている。 ・手洗い場は使用蛇口を決め、手洗い手順パネルを貼り、立ち位置に足型を配置する、保育室内の座る位置・立つ位置にビニールテープを貼り、テーブル使用時は同じ方向を向いて2人ずつ座る等、子どもが視覚で具体的にわかるよう工夫した結果、生活習慣として身につけることができた。 ・楽器遊びではテーブルを前に置き距離をとる、4、5歳児保育室の間にプレイルームを設けクラスの間隔を取る、手作りダンボールパーティションやコーナーで遊びの拠点を作り、子どもが自然に距離をとって分散して遊べる環境を作る等、子どもがストレスを感じることなく感染予防対策ができるよう工夫が行っている。
良いとこ自慢！	(保育内容面) ・シリア、ラオス、フィリピンなど外国籍の子どもの受け入れにより、自然と子ども同士または親も巻き込んだ国際交流を行っている。	・言葉のわからなさや文化の違いによるルールの違いなどを交流していく。 ・お互いが理解しあえるように、橋渡しをする。	・日々の保育や行事を通して、ともだちとの関わりが増えるよう保育内容を工夫した。 ・外国籍の子どもが集団でのルールのある遊びにも入れるように写真、絵などでルールを伝えるよう支援した。	・最初は言葉のわからない子どもに始めた支援であったが、他の子どもにもわかりやすかったようで、お互いを理解しあえるまでになった。転入児に対して、みんなと一緒に世話が出来るようになる自信がついた。分かり合える喜びを知ったようだ。ルールのある遊びに今では喜んで参加している。	・多国籍児童が多い中、視覚支援が適宜行われ、言葉の壁を超えてルールがわかるようにされている。また支援の必要な幼児に対しても、適切なかかわりができており、集団生活に慣れるなど、成果が著しい。こうした多様性をもった集団の中で子どもたちがお互いを尊重し合うような教育がなされているといえる。 ・保育活動の内容を保護者に知らせるために、ドキュメンテーションを自分たちで作成したり、自分たちでさまざまな活動を企画したりと、主体的・能動的に遊びや生活を創り出していく資質能力をつけることができています。いろいろな場面で子どもたちが主体的に活動するように教育的配慮がなされている。
	・教職員全員で、幼児の一人ひとりに対して自由な遊びや保育の中で自己発揮できる場を作ることを意識し個人理解と保育展開を考えている。	・6月入園、進級の子どもたちへの個々の成長に合わせた保育展開に配慮する。 ・一人一人の内面を読み取り、支援の方向性を探る。	・今年は、子どもの内面理解だけでなく、子どもを取り巻く環境や保護者自身の問題、病気が子どもに影響していることが多い。そのことから、全職員が一人一人の子ども、保護者の様子を共通理解していけるよう、話し合いの場を多く設けた。	・色々な問題を抱えている家庭や親の子ども達は、今では全員通園している。保護者自身も登園時間を他とずらせたり、登園時の休憩部屋をつくって落ち着けるようにしたことで、休ませなくなった。 ・全職員が共通理解したため、一人一人の子どもの成長を確保している。	・職員間で話し合いの機会を多く持ち、子ども自身の理解だけでなく、家庭環境や保護者の事情や体調等を共通理解し、方針を統一し、連携して個別の配慮・支援を行っている。保護者の心身の状況に留意し、その日の状況に応じた対応を行う等子どもが通園を継続できるよう、保護者の個別支援を丁寧に行っている。
ここを改善！	(保育内容面) コロナ対策が今後も続くと思われることから、幼稚園の新しい生活様式を考えている。	・子ども達にもソーシャルディスタンス等を意識しての生活について伝える。 ・遊びを楽しみつつも、接触等を減らすことが出来るように工夫する。	・日々の生活の中で、子どもたちがソーシャルディスタンスを意識して生活できるように声掛けや椅子の配置等の表示を行った。 ・マスク生活の中でのルール（場所、時、管理等）を徹底した。 ・子供の成長には欠かせない行事等の見直しを図った。	・子どもたちの中でも手洗いや静かに食事をする、ソーシャルディスタンス等が定着した。 ・子どもが主体的に生活するようになり、自分たちの遊びのドキュメンテーションが作れるようになった。その様子を保護者に張り出し、コメントを貼ってもらい参加型にしたことで子どもたちの意欲が高まった。	感染症への対策により行事を見直した結果、子どもたちが主体的に動く場面が増え、密を避けながら4歳児と5歳児の交流が図れたのが良い成果をもたらしたと考えられる。また、さまざまな文化的背景をもった子どもたちがお互いを理解し合いながら生活しており、より豊かな社会性が培われている。
	(管理・運営面) ・コロナ感染予防のため、参観日や行事がなくなり、保護者の参観機会が減り、保育の様子が伝えられない。そこで、お迎えの時に工夫して伝える。	・ホームページやドキュメンテーションをエントランスに張り出したりお向け時のスピーチを工夫し、保育の様子を伝える。	・参観日や発表会の保護者参観の方法をその時々感染状況や保護者の思いも受け止めながら行った。 ・ホームページやドキュメンテーションをエントランスに張り出すことのほかに、子どもの連絡帳にそれぞれの子ども様子を写真とともに伝えたり、お帰りの時のスピーチの工夫をした。	・安心して園に通わせられるよう消毒、喚起の徹底等をしっかりと伝えていった。参観日等に参加する方の健康チェックも行った。 ・参観日の持ち方を分散型にしたことにより、密を避けることが出来た。日々の保育を写真やスピーチ等で伝えることによって、安心感が生まれた。	・保護者の思いを受け止め、感染予防対策をとりながら、参観日（11月）・発表会（12月）を実施し、保護者と子どもの成長を共有する機会を持つことができた。 ・連絡帳（コメントと写真で子どもの様子を伝える）、降園時のスピーチ（毎日の様子を話す）、ホームページ・ドキュメンテーションの掲示等、コロナ禍で参観機会が減る中でも、保育の様子を保護者に伝えられるよう様々な工夫がなされている。グループに分かれて行った「子どもプロジェクト」について、子どもたち自身がドキュメンテーション作成し、写真やコメント記入で発表する取り組みも行われている。